

7・15共産同大政治集会へ

午後6時 千駄ヶ谷区民会館

游
擊
手

共産主義者同盟政治機関紙

第 33 号

1977. 7. 5

特価 200 円

普社
北游
澤擊
田谷局
便4号
都世田
千歲書
私東京
振替東京
10回2000円(開封・送料共)
2500円(密封・送料共)

今春期三里塚の激闘を継承し

総蜂起路線の下、攻勢的党建設を

すべての同志友人諸君

われわれは、三里塚四日間戦闘の革命的意義を階級戦線のなかに生かし切り、三年有余の党建設の全成果を明らかにし、七月十五日共産同大政治集会を開催する。

革命的労農学の三里塚四日間戦闘の大爆發は、確かな手ごたえをもつて革命的情勢を端緒的接近をより鮮明にするものであった。

まさに今春期の激闘は、三里塚闘争をはじめとして、沖縄公用地粉碎闘争、狹山最高裁決戦と労働者人民の憤激の細流が革命的政治闘争として広さと深さをもつて日帝支配を根本的に搖ゆかせる奔流へと結合しつつある。ブントが六七年十一・八羽

田闘争で、「ベトナム革命勝利」のプロレタリア国際主義と組織された暴力の革命的スローガンのもとに日本階級闘争の歴史的転換点を形成し、領導し抜いた以上に、この三里塚四日間戦闘の意義は、重大である。いわば革命的情勢の端緒的接近の中、大衆の憤激の自然発生性に拡張するのではなく、その要素を革命党的政治組織戦と結合させ「歴史的転換」に向わしめるものでなければならない。この革命的情勢の端緒的接近に革命的指導をより一層の広さと深さをもつて階級的ななかに體現的分歧を持ちこみ総蜂起路線への統合のもとに革命党建設の主体的飛躍を獲得しなければならない。

戦国主義支配体制の崩壊は、すでに誰の目にも明らかになつた。ブントが六七年十一・八羽

となりわけ東アジアにおいて、歐州・中東を主戦場としたカーター戦略の発動に伴ない、米日「韓」反革命臨戦体制の再編の動きのなかで日帝は、米帝からの一定程度の肩替りをして沖縄の前線基地化の攻撃の強化をテコとしたより朝鮮侵略反革命の策動を強めている。

日帝は、日「韓」議連「日「韓」親善協会の形成によつて打ち固めによって入管体制の強化、排外主義国民統合を通じて侵略反革命体制づくりを急ピッチで進すめており、それは「日ソ漁業交渉での領海二二カイリ、漁業專管水域二〇〇カイリをめぐる日帝の領土をからめた「反ソ」宣伝と「国益」排外主義による既成政党の喝和に、日帝の反革命的意図が明らかである。それは、八月ASEAN会議へ日帝の出席、アジアの反共軍事独裁国家への歴訪を準備している。

こうした権力の攻撃の激化の中で、従来の「左」派が中間派に、中間派は右翼日和見主義に転落し、社帝派はより一層帝国主義に屈服し自らその救済者に純化し、革命派への背後襲撃をしき、大衆的憤激は、民主主義的地位までも含めてさまざまな勢力として登場していく。そうであるが故にわれわれは、日和見主義・中間主義との階級的分歧をより一層鮮明にさせ、党と階級の厳格な区別をもつて党建設と階級形成戦の一個の任務として三里塚四日間戦闘をはじめとする

☆
★
★★
国主
主義の腐朽性に抗し、社会帝国
主義・社会排外主義と対決して世界
革命の最前線へ！
革命の最前線へ！
帝国主義心臓部にプロレタリアート
転化せよ！
の総蜂起を！
★
★

6.15政治共闘一周年中央闘争に赤ヘル 500 の結集

第二期工事区域内に 東峰現闘小屋を建設!!

ジャンボ・ライトチェック阻止



7・24現地闘争に結集せよ！

全ての同志・友人諸君 夏期カンパの圧倒的集中を！

共産主義者同盟

振替 東京0-195783

全国の同志、友人、「遊撃」読
者諸君！
夏期一時金カンパを全力を挙げて
我が共産同に集中されるよう強く
要請する。

労働者階級人民の新たな政治的活
動化は、プロレタリア人民の不満、
憤激の高まりの中で、革命党との
結合が不可避であり、社会主義革
命の勝利へと牽引し抜く党建設の
課題はますます重大なものとなつ
てきている。情勢の煮つまりと
も階級分解は推進され、日和見
主義諸派が社会排外主義へ中間主
義諸派が日和見主義へ転落を開始
している。

諸階層の混亂と没落の中で我が
共産同は、階級闘争の内乱的成熟
を对象化し、社帝派、社会排外主
義潮流との戦いをも取組し、部分
的蜂起、局地的内戦の発展を領導
し、国内戦に直結する武装蜂起の
戦取に向つて、全力をあげて今日
まで前進してきた。共産同の三全

全ての同志、友人諸君、夏期一
時金五割カンパを党に集中せよ！
党的建設の物質基盤を今夏期一
時金闘争においてさらに強化せよ！
カンパ送り先

全期カンパ闘争以上の闘いを組
まなければならぬ。

今夏期一時金カンパ闘争は、昨年
上の一大任務として位置づけ昨年
冬期カンパ闘争以上の闘いを組
まなければならぬ。

春期の大きな前進を一步も後退さ
せることなく、第二次ブントの党
機関誌「遊撃」の新聞定期化の戦
闘はその第一歩である。我々は今

春期の大きな前進を一步も後退さ
せることなく、第二次ブントの党
機関誌「遊撃」の新聞定期化の戦
闘はその第一歩である。我々は今

総路線＝総蜂起路線の物質化を今
春期の三里塚闘争を中心的課題と
して実現してきた。第二期工事区
域内の現闘小屋建設、共産同政治
闘争に真に党が答える生命線とい
うべきである。したがつて、
春期の大きな前進を一步も後退さ
せることなく、第二次ブントの党
機関誌「遊撃」の新聞定期化の戦
闘はその第一歩である。我々は今

の全過程を今春期の闘争につぐ闘争の全蓄積をもつて闘い抜いていかなければならぬ。
それは、一部ブント系諸君のなかで組織建設を路線化するこ
とによつてこの高揚から身をそらし階級的規定力を喪失した
觀念化的啓蒙主義サークルへと転落押し流されている以上、
わが党建設の勝利的展開は、より一層の重要性をまして
いる。

この激動の時代こそ、一日が十年にも匹敵するという歴史的
転換点である以上、従来の「常識」など何の役にたたないの
は勿論であるが、そうであるが故により一層革命党的领导の
もとに「如何に闘うか」によって七〇年代後期から八〇年代
にかけての日本階級闘争の基本構図を決定づけるものとなつ
ているのだ。

われわれは、この重大な局面の中でも共産同大政治集会を開催するにあたつて本集会の基調に準ずる本論文を提起する。
革命的情勢の端緒的接近を確実にいたりよせ、生起しつつある階級闘争の新らたな段階を歴史的転換点に向わしめるため
に、わが党的领导の今夏、秋期の任務に引きよせて提起したもの
で、七月ジャンボ・ライトチェック粉碎、八月福島ASEA
同大政治集会をかちどるであろう。七・五一其産
の革命党建設と総蜂起の大道へ！

6.12 東峰新現闘小屋開き

反対同盟との团结で貫徹！ 三里塚現闘団

全ての同志友人諸君、共産主義革命戦線闘団より、六月二十一日、第一期工事区域（一千五百メートル滑走路）に位置する東峰部落での我が現闘小屋びらきが、反対同盟、支援団体六〇名の結集をもつて成功裡のうちに貫徹したことを報告する。

現闘小屋びらきは、午後一時から反対同盟事務局長、東峰部落実行役員石井武氏をはじめとする反対同盟の多くの人々の結集を得、開催された。

まずははじめに、現闘団から、この間の小屋建設にあたって北原事務局長、東峰部落実行役員石井武氏をはじめとした反対同盟、部落の物心両面にわたる支援に感謝するとともに、この支援に報いるべ



部落との結合を深め、三里塚空港粉碎の日まで共に闘い抜かん」とのあいさつにつき、橋石副委員長、木の根部落の小川源氏、老人行動隊長相川豊彦氏をしてこの間の小屋建設にあたって支援をいたした石井武氏のあいさつを受け、参画者全員の新たな意を奮い立たせるものとしてかちこられた。そして東峰部落島村良助氏の音頭により、これから間闘への決意を表明する。

東峰新団結小屋（写真上）の小屋開きは反対同盟との團結のもと圧倒的に成功であり、ここに我々革派の新しさが示された。私服による當時の監視体制、鉄パイプを持つ威迫機動隊二個小隊による包囲という攻撃をはねのけ、この小屋建設は反対同盟とのガッチリした連携をもつて開始されたのである。

この東峰現闘小屋の戦取こそは武裝的發展の中での三里塚闘争の勝利をもつていて多くの決意表明が示された。しかし東峰は第二期「事区域」内に於ける、ここに我々革派の新しさが示された。私服による當時の監視体制、鉄パイプを持つ威迫機動隊二個小隊による包囲という攻撃をはねのけ、この小屋建設は反対同盟とのガッチリした連携をもつて開始されたのである。

東峰新団結小屋（写真上）の小屋開きは反対同盟との團結のもと圧倒的に成功であり、ここに我々革派の新しさが示された。私服による當時の監視体制、鉄パイプを持つ威迫機動隊二個小隊による包囲という攻撃をはねのけ、この小屋建設は反対同盟とのガッチリした連携をもつて開始されたのである。

日共の敵対はねのけ

明大農学部

政治共闘結成一周年をかちとる

一切の日和見主義・召還主義を粉碎し

六・一五侵略反革命阻止全国政治共闘結成一周年、中央闘争は坂井、総体として「人民共闘」なとして浮上せしめた。我々は今日

本町公園に赤ヘル革命派五〇〇のる右翼のカンパニア主義へ流れ、この革命的端緒を明確に對象化し

社民、四トロとの分歧を鮮明にでここで獲得した成果をより階級深

部へ浸透せしめ、広範な労働者人氏、諸サトクルをわが政治共闘へ

であり、ここに我々革派の新しさが示された。私服による當時の監視体制、鉄パイプを持つ威迫機動隊二個小隊による包囲とい

う攻撃をはねのけ、この小屋建設は反対同盟とのガッチリした連携をもつて開始されたのである。

この東峰現闘小屋の戦取こそは武裝的發展の中での三里塚闘争の勝利をもつていて多くの決意表明が示された。しかし東峰は第二期「事区域」内に於ける、ここに我々革派の新しさが示された。私服による當時の監視体制、鉄パイプを持つ威迫機動隊二個小隊による包囲とい

う攻撃をはねのけ、この小屋建設は反対同盟とのガッチリした連携をもつて開始されたのである。

この東峰現闘小屋の戦取こそは武裝的發展の中での三里塚闘争の勝利をもつていて多くの決意表明が示された。しかし東峰は第二期「事区域」内に於ける、ここに我々革派の新しさが示された。私服による當時の監視体制、鉄パイプを持つ威迫機動隊二個小隊による包囲とい

秋期闘争のばねとせよ 六・一五の勝利を

六・一五闘争の勝利は、第三に四日間闘闘に示されたように、國家権力のなりふりまわぬ奇襲的反革命攻撃と、それに対決する先鋭的武装闘争の爆発は、今日大競争し、かつ憎悪をむき出しにし

た機動隊、私服の重包囲をうち破り、戦闘的デモを貫徹した。

三里塚四日間闘闘をつぐ六・一闘争の勝利こそは、第一に切

り拓かれた情勢の革命的端緒を方

五・六抜きも鉄塔爆破をもつて闘争の「鎮静化」なるものを

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

六・一・五闘争の勝利は、第三に四日間闘闘に示されたように、國家権力のなりふりまわぬ奇襲的反革命攻撃と、それに対決する先鋭的武装闘争の爆発は、今日大競争し、かつ憎悪をむき出しにし

た機動隊、私服の重包囲をうち破り、戦闘的デモを貫徹した。

三里塚四日間闘闘をつぐ六・一闘争の勝利こそは、第一に切

り拓かれた情勢の革命的端緒を方

五・六抜きも鉄塔爆破をもつて闘争の「鎮静化」なるものを

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

六・一・五闘争の勝利は、第三に四日間闘闘に示されたように、國家権力のなりふりまわぬ奇襲的反革命攻撃と、それに対決する先鋭的武装闘争の爆発は、今日大競争し、かつ憎悪をむき出しにし

た機動隊、私服の重包囲をうち破り、戦闘的デモを貫徹した。

三里塚四日間闘闘をつぐ六・一闘争の勝利こそは、第一に切

り拓かれた情勢の革命的端緒を方

五・六抜きも鉄塔爆破をもつて闘争の「鎮静化」なるものを

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

六・一・五闘争の勝利は、第三に四日間闘闘に示されたように、國家権力のなりふりまわぬ奇襲的反革命攻撃と、それに対決する先鋭的武装闘争の爆発は、今日大競争し、かつ憎悪をむき出しにし

た機動隊、私服の重包囲をうち破り、戦闘的デモを貫徹した。

三里塚四日間闘闘をつぐ六・一闘争の勝利こそは、第一に切

り拓かれた情勢の革命的端緒を方

五・六抜きも鉄塔爆破をもつて闘争の「鎮静化」なるものを

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

六・一・五闘争の勝利は、第三に四日間闘闘に示されたように、國家権力のなりふりまわぬ奇襲的反革命攻撃と、それに対決する先鋭的武装闘争の爆発は、今日大競争し、かつ憎悪をむき出しにし

た機動隊、私服の重包囲をうち破り、戦闘的デモを貫徹した。

三里塚四日間闘闘をつぐ六・一闘争の勝利こそは、第一に切

り拓かれた情勢の革命的端緒を方

五・六抜きも鉄塔爆破をもつて闘争の「鎮静化」なるものを

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

六・一・五闘争の勝利は、第三に四日間闘闘に示されたように、國家権力のなりふりまわぬ奇襲的反革命攻撃と、それに対決する先鋭的武装闘争の爆発は、今日大競争し、かつ憎悪をむき出しにし

た機動隊、私服の重包囲をうち破り、戦闘的デモを貫徹した。

三里塚四日間闘闘をつぐ六・一闘争の勝利こそは、第一に切

り拓かれた情勢の革命的端緒を方

五・六抜きも鉄塔爆破をもつて闘争の「鎮静化」なるものを

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

六・一・五闘争の勝利は、第三に四日間闘闘に示されたように、國家権力のなりふりまわぬ奇襲的反革命攻撃と、それに対決する先鋭的武装闘争の爆発は、今日大競争し、かつ憎悪をむき出しにし

た機動隊、私服の重包囲をうち破り、戦闘的デモを貫徹した。

三里塚四日間闘闘をつぐ六・一闘争の勝利こそは、第一に切

り拓かれた情勢の革命的端緒を方

五・六抜きも鉄塔爆破をもつて闘争の「鎮静化」なるものを

三・三・三集会四日間闘闘を頂點とした三里塚決戦の終過程は、

うとしているのである。
かかるにこの米帝の世界政策は、米—西独—日本の枢軸を強化する意圖を生産基軸の大転換を押しつかれて打ち上げるとしているのである。

ひるげようとしている。そのことは列強間の抗争と対立が激化せざるをえないものである。いわばそれは、必然的に、米帝カーター戦略の帰結として、米ソの霸権争奪戦に拍車をかけ、米ソ世界戦争の要素が著しく増大する。

それは単純に二つの超大国の政治・軍事緊張の激化という側面のみではなく、中進国後進国従属国を巻きこみ、民族的、階級的利害を犠牲にし、転嫁しつつ行なうことを意図している。

のである。すなわち、米、ソは表面上では SALT II、つまり軍備縮少交渉を行い、裏では軍備の増強を計画的に準備し、平和共存政策は自己の意図を相手に突きつける場の設定の道真でしかないものである。

まさにその様な位置にある ○カイリを宣言したのである。まさに「領土」問題をからめ、伝_トをあおり、利用せんとし、ソ帝の漁業監管水域が軍事的攻撃の質を明らかにするの評論家は、同盟と共にして訪

のを、ソcialismは逆手にとつて二
院選を射程にいれて、「反ソ宣
いるのである。しかし社共は、
ソ連の覇権行為をそのまま
千島「返還」とひきかえ
悪の売国政策に他ならぬ
宮本一味は「アメリカが
りめぐらしている」ので
してはならない。ソ連はあく
までも威行動を孕むものであるとい
はなく、議員団の派遣、また総
し、日帝の排外主義に唱和して

のちに、連と詰しあい全千島列島（ニシテイ）は、日本本土をソ修に差し出すという最も認められた従属条約を締結し、更に全世界においては主権を有する。ナゼナリの「國家政策」という。これは現実の侵略である。ソ侵の本當の力は人民の中に存在する。全民族的な長期にわたる武装抵抗は必ず要求されるだろう。反霸權勢力は、日本の武装解除策動に真向から反対することともに、硬直したドグマをすて精神的に備えを確立することにより侵略と被侵略を決して同一視するに力を尽さなければならぬ」

章 2 第
ソ社会帝の霸権主義を、東アジア人民と
結合した日帝との総路線的闘いの下に
位置づけ、その反革命性を暴露せよ

今日、革命的情勢の端緒的接近が、煮つまり、成熟しつつあることは、まぎれもない客觀的事件であり、それは全世界的規模で拡大し、プロレタリア人の攻勢の基調を形成している。その國際的階級關係は国内階級關係にも複雜な様相をはらみつ端的に形成されつつある。とりもなおさず、國際的諸条件の変化は不可避的に日帝の戦後55年体制の崩壊として一層明確にそのことを示している。

その事は一方では、今日の、ソ社帝の國際的國家關係を媒介するものとしての戰略的位置が、革共同中核派の言うように「ステーリン主義みずから媒介として基本的に延命せしめた帝国主義の基本的矛盾の爆発過程に受動的・対抗的極的にまきこまれる」とともに、それも一要因として「國的社會主義建設なるものの官僚制的疎外の深刻化とゆきづまりの激化にあえがざるをもたらすための反プロレタリア的、官僚的内外政策の暴力的展開の必然性とその特殊的規定性」(『共産主義者』30号 西武志論文)という帝国主義の戦後体制の動搖的崩壊、世界的危機に巻きこまれていくというあいまいな階級性格ではない。

我々はすでに「遊撃」二九号でソ連の社會帝国主義への転換は、第三インターにおけるレーニン主義の未貫徹の問題として、国际共産主義運動の総括の觀点から明らかにし、ステーリンの「階級闘争消滅論」を論拠に裏付けられつつ、スターイン死後は、スタ国家官僚独裁体制から、更にソ連二回大会でより明確にプロレタリア階級独裁を完全に投げ捨てたり、全民国家、共産主義社会の全面建設段階の突入と言ふエセ綱領を完成させ、ソ連帝ブレジネフはボドゴルヌイ最高幹部會議長を解任し、それをおさまり共産党書記長を兼任することによって、名実ともにブレジネフ独裁体制を確立し、かつブレジネフソ連新憲法草案を定型化し、ステーリン憲法の「労働者、農民の社會主義国家」の規定から正式に「全人民的國家」と規定し、社會的生產の最高目的が人びとの増大する物質的、精神的欲求を完全にみたす事がなしえたとし、61年の黨綱領が「共産主義の全面建設」から新憲法草案が「發展した社會主義社会」として規定と役割の強化は、共産党がソヴェニット社会の指導的中核として明記されている。今回の新憲法草案の特徴は、社會的自治を社會主義的民主主義の拡大として表示し、かつ党的位置と役割の強化は、諸民族を中央集権化のもとに強制的に統合し、その結束を打ち

人民の反抗、憤激を包摶する一定の権力の構造をとりつくる。国家官僚ブルジョア階級の利害の貫徹を隠蔽し、党が国家によつて變るという倒錯を行つことによつて、党と國家を自己の手の中にし、霸權主義の国内的打ち固めとして、その域内和平を主として、逆に米帝カーター人権外交に対抗し、緊張緩和(デタン)ト)を売りものにし、軍縮、非核拡散をうたえ、ソシ帝は西欧の仏との新たな同盟関係の強化をテコに、中東、キプロス、南アフリカを外交の拠点として仏帝国主義を位置付け、米帝か一々外交に切りこむものとして、仏首脳会談が特例だ、新たな巻き返しと攻勢を仕かけているのである。

このことは、植民地従属国人民の民族解放・社会主義継続革命の前進と中国文化大革命の開示した地平によって、より一層ソシ帝の階級的性格が鮮明なものになつた。今日的には、三〇年代のアーノドジャーのもとにソシ帝を戦略的な位置として同位相に規定することは出来ない。すなはち帝国主義的対立の激化して帝国主義世界戦争の爆発に、スターリン主義のソ連スタ官国家が、受動的にまきこまれて、ジグザグをくり返し、国際的に成ム連合との同盟に加担し延命をまつとうしたにすぎないといふ立したファシズム独裁体制を先行とする帝国主義の攻勢に対し、防禦にたたされ、最後によく米英仏連合との反ファシズム連合との同盟に加担し延命をまつとうしたにすぎないといふ「体制間矛盾論」からの受動的なものでない。今日、ソシ帝は協商を繰り返しその霸權主義としての性格を明らかにしていく点にこそその階級的性格はある。

ソシ帝は「アジア安保」を軸心にすえ、インド洋における海軍力を主軸にすえ米帝との軍事的対立抗争を激化させている。またアフリカ大陸におけるアンゴラ、モサンビーケ、サンビニアンザニア、ボツワナ等の南アフリカ人民の、白人宗主国との小数支配による人種差別、抑圧攻撃と植民地主義の隸屬状態に対する民族解放闘争の勝利的前進は、更にナミビア、南ア、ローケシアの三国人民の闘いへと發展し、その闘いを先の近隣諸国ケ国は自國の建設の力をさして多大な自己犠牲を引きうけ支援を行なつてゐる。

イギリス、フランスなどの没落停滞しつつある帝国主義の娘民地である南アフリカ大陸において、アフリカ南部二国に多大な利権を有するアメリカ帝国主義の新植民地主義の介入は西諸帝国主義との暗闘を引きおこしつつ、白人植民地主義政権を永続させようと必死になつてゐるのである。また南アの産金割以上の大権益を占有しているソシ帝はこの争奪戦に介入してゐるのでだ。このことはアフリカ人民の白人植民地支配からの民衆反乱に対する反撲攻撃が、月日を経ていつつも止みこむ。(1月)

この様な事態の進行は、一方では日本の中共派（毛沢東主義）諸派、内部において公然と「ソ連帝の霸権主義」の評価と、米帝、日帝との関係に対する態度をも含めて、激裂な論争が開始されている。このことは、一部革命派内部の毛沢東思想派は総じて中共諸派は良質な民族派・民主主義的部品であると自負し、解しているようであるが、この左からの左翼帝和見主義、ブルジョア民族主義の台頭に対して、断固として武器の批判を明らかにする革命派の政治的態度が要求されているのである。その意味において、日本の毛派内部の激烈な戦闘的論戦を、今日的に我々は正しく対象化してゆかなければならぬ。

自主出版の「ソ連問題調査センター」遠坂良一編集発行の「ソ連問題」＝反霸権統一戦線戦術の諸問題IIの論争特集旁に、おいて明らかにされている論戦の諸論文は、こうした中共派の内部からイデオロギーが登場していると言う意味で、今日中止上ける事にする。その論争の頭目は「自主独立路線」を表す宮本修正主義集団の正体、と題する東広志論文である。

まずははじめに若干のフレーズをつかみだすと、「七一年以降、世界の情勢が大きく変化し、ソ連の霸権主義が日本人民の最大の脅威として立ち現われている。ソ修社会帝國主義の日本に対する威嚇、干渉が強まるとともに、ソ連と宮本修正主義集団の結託が目立つて進んでいる」という危機意識のもとに、「宮本一味の議会主張、平和革命という点にしか注意を向けない人が多く、米帝や独占資本と闘わないから良い、プロレタリア党が選挙で多数を占めることは幻想なのに、領海十二カイリと同時に帝國主義の略奪、収奪を打破するものである。

現在の日帝とソ連帝との対立抗争の根柢である漁業専管水域、二〇〇カイリは、国際海洋法会議によって帝國主義からの資源略奪にさらされていた第三世界が大陸棚の自然延長論によつて、領海十二カイリと同時に帝國主義の略奪、収奪を打破するものである。

また日ソ漁業交渉においても明確にあらわれているように、現在の日帝とソ連帝との対立抗争の根柢である漁業専管水域、二〇〇カイリは、国際海洋法会議によって帝國主義からの資源略奪にさらされていた第三世界が大陸棚の自然延長論によつて、領海十二カイリと同時に帝國主義の略奪、収奪を打破するものである。

この様な事態の進行は、一方では日本の中共派（毛沢東主義）諸派、内部において公然と「ソ連帝の霸権主義」の評価と、米帝、日帝との関係に対する態度をも含めて、激烈な論争が開始されている。このことは、一部革命派内部の毛沢東思想派は総じて中共諸派は良質な民族派・民主主義的部品であると自負し、解しているようであるが、この左からの左翼帝和見主義、ブルジョア民族主義の台頭に対して、断固として武器の批判を明らかにする革命派の政治的態度が要求されているのである。その意味において、日本の毛派内部の激烈な戦闘的論戦を、今日的に我々は正しく対象化してゆかなければならぬ。

自主出版の「ソ連問題調査センター」遠坂良一編集発行の「ソ連問題」＝反霸権統一戦線戦術の諸問題IIの論争特集旁に、おいて明らかにされている論戦の諸論文は、こうした中共派の内部からイデオロギーが登場していると言う意味で、今日中止上ける事にする。その論争の頭目は「自主独立路線」を表す宮本修正主義集団の正体、と題する東広志論文である。

まずははじめに若干のフレーズをつかみだすと、「七一年以降、世界の情勢が大きく変化し、ソ連の霸権主義が日本人民の最大の脅威として立ち現われている。ソ修社会帝國主義の日本に対する威嚇、干渉が強まるとともに、ソ連と宮本修正主義集団の結託が目立つて進んでいる」という危機意識のもとに、「宮本一味の議会主張、平和革命という点にしか注意を向けない人が多く、米帝や独占資本と闘わないから良い、プロレタリア党が選挙で多数を占めることは幻想なのに、領海十二カイリと同時に帝國主義の略奪、収奪を打破するものである。

現在の日帝とソ連帝との対立抗争の根柢である漁業専管水域、二〇〇カイリは、国際海洋法会議によって帝國主義からの資源略奪にさらされていた第三世界が大陸棚の自然延長論によつて、領海十二カイリと同時に帝國主義の略奪、収奪を打破するものである。

また日ソ漁業交渉においても明確にあらわれているように、現在の日帝とソ連帝との対立抗争の根柢である漁業専管水域、二〇〇カイリは、国際海洋法会議によって帝國主義からの資源略奪にさらされていた第三世界が大陸棚の自然延長論によつて、領海十二カイリと同時に帝國主義の略奪、収奪を打破するものである。

一部毛派反霸権統一戦線のフルジニア民族主義・階級的投降主義を暴露せよ

帝国主義に迎合する「反霸権統一戦線」

この様な事態の進行は、一方では日本の中共派（毛沢東主義）諸派、内部において公然と「ソ帝の霸權主義」の評価と、米帝、日帝との関係に対する態度をも含めて、激烈な論争が開始されている。このことは一部革命派内部の毛沢東思想派は総じて中共諸派は良質な民族派、民主主義的部品であると自己了解しているようであるが、この左からの左翼日和見主義、ブルジョア民族主義の台頭に対して、断固として武器の批判を明らかにする革命派の政治的態度が要求されているのである。その意味において、日本の毛派内部の激裂な戦闘的論戦を、今日的に我々は正しく対象化してゆかなければならぬ。

自主出版の「ソ連問題調査センターワーク」遠坂良一編集発行の「ソ連問題」—反霸權統一戦線戦術の諸問題—の論争特集専号において明らかにされている論戦の諸論文は、こうした中共派の内部からライデオローグが登場していると言う意味で、今日の中共派内部論争の地平を開示している。我々がこれを考察する対象として取り上げるのに、一つの集大成として、また反面教師としても役だつものとしてこれを一つの典型的なものとして取り上げる事にする。その論争の頭目は「自主独立路線」を表す宮本修正主義集団の正体、と題する東広志論文である。

まずははじめに若干のフレーズをつかみだす。

「七一年以降、世界の情勢が大きく変化し、ソ連の霸權主義が日本人民の最大の脅威として立ち現われている。ソ修社会帝國主義の日本に対する威嚇、干涉が強まるとともに、ソ連と宮本修正主義集団の結託が目立つて進んでいる」という危機意識のもとに、「宮本一味の議会主議、平和革命という点にしか注意を向けない人が多く、米帝や独占資本と闘わないから良くない、プロレタリア党が選舉で多数を占めるとは幻想なのに、それを方針としているから良くない、『民主連合政府』が実現しても、インドネシアやチリのように米帝

データーで人民が血の海に叩きくないとか言う批判にとどまらないと同じであるといえる』

更に「アメリカを恐れ戦争から、アメリカを侮り世界を救えるをえない」として、「ソ連の時代へとノ修の社会帝國主義を遂行するため、親権を手助けし、自分もそこからももれないので、彼らは「自干渉」を批判してみせるし、する、真正止銘の親子両国、に重要な日本に巢食っているとみるべきである。今や宮本の時代へとノ修の社会帝國主義を遂行するため、親権を手助けし、自分もそこからももれないので、彼らは「自干渉」を批判してみせるし、する、真正止銘の親子両国、の時代へとノ修の社会帝國主義を遂行するため、親権を手助けし、自分もそこからももれないので、彼らは「自干渉」を批判してみせるし、する、真正止銘の親子両国、に重要な日本に巢食っている

「米ソ同列王敵で相国防衛は誤り」
「第一の敵」「官僚国家独占資本家」
「自分の目をおおつてしまい」「安保
えて満足してしまっている人が少く
タブー」は一刻も早く大胆にうち破
ために、あれこれの命題から出発す
る脅威、米帝の戦略、ソ米および日
の動向などを具体的に分析し、どう
守り、世界大戦に備えられるか具体
安保即時廃棄をいかがどうかが革新
する宮本一味は、硬直した「左翼的」
の反面教師である。……彼らは、
島還返を実現し、安保廃棄、米軍基
地撤去は現在は掲げない、というの
はずである。いかなる名目をつけよ
（ソ修のアジア侵出にとって最大の
たら、ソ修は率々と日本を支配下に
係からいって当然であるが、これは
地撤去は現在は掲げない、というの
る。同様に、対潜能力の増強、対馬
化などの日米防衛分担それを朝鮮侵
間、海は四日、陸は四週間で壊滅」
務は対ノ防衛に変っている。「仮想
然の秘密ではないか、しかもソ連軍
言う人もいるが）にも反対すべき理
由は、自衛隊の側が圧倒的不利である。
というのは、日本をソ修に売り渡す
脅威に備えるべきであって、自衛隊
現実に合致した「マルクス・レーニン主義の革命的政治路線」
もとに革命党を創建していくという原則的立場が、すなわち階
級的觀点を貫らぬいた立場、方法を根底的に欠如していること
が第一の問題である。当然にも彼らは、反帝・反独占の人民民
主主義革命（連合独裁）が綱領的立場である。

第一には、「どうして日本の独立と安全を守れるのか」という
ことから出発している。それは、ブルジョア民族主義はじめ
から屈服した姿である。また彼らは、日共の犯罪性とソシ帝の
霸權主義との蜜雲を暴露しているが、その批判の側面は幾つか
的をえているとしても、それはあくまでも反批判の位相でしか
ない。従つてソ連社会帝国主義に主要打撃を加え打倒すること
が究極的に「米・日帝」の打倒を早める道であるという反霸權
主義の教化論を論証しているのである。

かつその手がかりを、松岡洋子氏の「霸權反対」とはなに
か」の中の「アメリカの戦略の転換に対応して日本の反米基地
撤去闘争は戦術を転換する必要がある」『現代アジア』誌にお
ける井上清氏の「社会帝国主義に反対する日本人民の武器とし
て、つまり帝国主義相互の矛盾を利用するという面からの「安
保」に対する見方を視野に入れてこなければならぬ」という
提言」をするのが東論文の中心環である。

その主要な点は、世界大戦の主な資源地は、米帝からソ社
帝にその重心が移動していることに、情勢の基調がおかれてい
る。つまりソ帝を二〇年代のドイツナチズムに代位し、反フ
アンズム統一戦線を無検証に社帝・反霸權の祖国防衛民族戦争
に置きかえたにすぎない。しかしそれは、三〇年代のコミニテ
ルン線の社会ファシズム主要指撃論の一画面であり、反霸權
統一戦線こそ一切の主軸であるという発想は誤まりである。

その理論的基礎となつてゐる「セカンド・ワールド・ダイブ

左翼開錯主義の克服として提出されているが、中国共産党の三つの世界論を方イストのもとに、イギリスに最近結成された政策集団グループ「セカンド・ワールド・ディフェンス 第二世界防衛論」のソ米戦争とイギリス労働者階級 等の諸論文に依拠し、それを日本に適用し、「第一世界の防衛と日本人民の問題」として東論文の内容を理論的に根拠づけているのである。この東論文は、当面の緊急の任務の最小限戦術網領の位相の育子を再度要約すれば第一に七年以降、日本をとりまく国際情勢は基本的に変化した。第二に安保条約と自衛隊の役割変化第三に既成政党のブルジョア平和主義、社会主義に対し批判と態度、第四に右翼民族派との宣伝との一致についての立場である。

まず東論文に貫してつらぬかれている思想的基底は、何よりも、資本主義批判を基礎にプロレタリアートの戦術を明らかにし、ブルジョア政治権力を打倒し、一切の階級支配の廃絶に

それまで実に恣意的に規定された「型」の時間的序列に陥らざる
をえないものである。ここに不斷に形而上の的な思弁が生み出されてくる根拠もある。

従つて第一決断ノートの当初にあつた綱領——戦略という圖式の
とくに、マルクス「恐慌革命論」、レーニン「戦争革命論」とい
う型に切りぢぎてしまふ発想は、先の何々の「型」論が導き
出される必然的帰結であつたのだ。以上の視点を踏まえてとら
えるならば、レーニンの戦術思想、革命的内乱論等を真に学び
とることを拘束してしまい、内乱の諸問題を述べれば、中核派
なる低俗なレツテルはり、破壊した理論の教条的しがみつきで
しかないものである。その典型があの仏派の諸君である。我々は
前段決戦論一般を清算するつもりはないが、常に一般的に正し
いといふことは、実は何にも言つていなくていいことに等しいのであ
り、この様なあいまいな三〇年代ラセン的回帰、なしくずしつ

アシズム論等といった規定のもとに、軍事・武裝問題を上乗せしたり、權力性格、動向分析から直接的に武裝闘争の質を接するといった発想における問題を根底的に止揚する地平に立脚してのみ、前段階戦論の恣意性を排除しうるのであると確信する。そしてより攻勢的党建設に内実したプロレタリアートの革命的戦術の攻勢として正しく生かし切つていくことが要求されているのである。この主体的概念の介在を抜きの前段階級は常にブルジョアジーからしかけられた決戦として單一の戦場におけるこちら側からする設定という能動的実践との主客の分裂をひき起こしてしまうのである。従つてまず党建設の内に攻勢的、能動的実践を獲得し、更に階級形成戦を通したプロレタリア大衆の革命的獲得として二重性を持つた指導の貫徹が問わわれているのである。

第 4 章

路線と反アシヨ統一戦線と レーニン共産主義戦術

したコミニテルンに深刻な反感を投げつけたのである。ドイツにおけるナチスファシズムへの敗北の総括的教訓として打ち出されたのは、コミニテルン第七回大會路線としてディミトロフによる「反ファシズム統一戦線」論であった。この六回大会から七回大会（一九三五年七月～八月）の転換路線は、ます第一に六回大会の第三類論を基礎に、綱領の原則的部分の総括は一切捨棄され、「ファシズムの攻勢と共産主義インターナショナルの任務」において（そこには、依然として全面的危機論・自動崩壊論がよこたわっているが）、ファシズムの階級的性格とその本質規定を行ない、燃えたきる憎しみをもつてファシズムに対する闘争を全世界の共産主義者と人民に呼びかけている点は正しく評価し、繼承しなければならない。

ドイツ革命の教訓と コミニンテルン七回大 会路線＝反ファシズム

そこでは、ファシ 間の相互の関係と情勢の特殊性の窓

ズムの階級的性質を見事な科学的分析を通して定義している。一方で、権力をもつたファシズムは、金融資本のもつとも反動的な一面をもつてゐる。この二つの立場は、必ずしも対立するものであるが、しかし、シズムの制覇によって、情勢に決定的な変化がおこったこと、これ

ティミトロフのトツキ一批判の位相

民戦線の創設のための土台を準備するだろう。更にディイフはいう。「我々の直面する戦術問題の觀点から、社会主義は現在なおブルジョワジーの主要な城塞であるか、

ミトロ 民主主義は、うつり、中間階級なしに、一直線に、共産党員と團結しようと想像してはならない。いくつがの国々では、これ少なかれ困難で複雑かつ長期の過程をとる。いずれに

するだろ
は多かれ
せよ、根
友好的態度を示す等のフランス的人民戦線路線が侵触して行つ
たのであるが、結局コミニテルンの「統一戦線」戦術は、一方
では解党主義を発生させ他方では共産党それ自身を社民化、第

This is a grainy, black-and-white photograph capturing a large outdoor gathering, likely a protest or public demonstration. The scene is dominated by a dense crowd of people, their forms appearing as dark shapes against a lighter, hazy background. A prominent vertical structure, possibly a flagpole or a tall signpost, stands on the left side of the frame. The atmosphere is one of a major public event, with the sheer number of people filling the frame.

は革命に導くための、道筋、その発展コトの「方法・連絡」をみいだすことである、政治主義的、あるいは左翼市民的の改変し、社会民主主義者の闘争に「ひきづりだす」こととした。すなわち「日常闘争を通じて統一線へ」を「党の最も緊急な任務は一切の主な工業国において同様に進行しつつあるグローバル化の攻撃にたいするプロレタリアートの抵抗を組織することだ。八時間労働時間へ」、「現行の賃金率の維持と増加、一切の直接的な経済要求のための闘いこれらすべて組織解体されたプロレタリアートを再び組織化し、自己の力と未来にたいする彼らの信頼回復するための最可の可能な政綱である。」はただちに資本主義の攻撃を拒否し、労働階級に統一の精神をふきこむことのできる切の「統一行動」のなかでニニシナチズムをとらければならぬ」（選集第一巻）とのべられることく、「プロレタリアートの革命的力単に改良的諸闘争のなかで發揮されるものはない。プロレタリアートの力量は、みから直接かかえている歴史的課題、資本主義から克服に結びつけられたときに最大となるだろう。これは決して改良闘争の否定でない。改良的経済主義と共産主義との相違

前者が改良を重視し、後者が改良のための闘争を軽視ではなく、社会民主主義は改良のための闘争のため認めないのに対して、共産主義者はプロレタリア革命的政治闘争を認め、その運動を、政治闘争に高めたことが最大の功勞である。従つてトロツキーはアの共産主義への獲得ということを歪曲して、社会闘争という改良主義、経済主義の綱領のもとにプロレタリアの獲得することだと述べる。更にトロツキーは「統一戦線の要は、自身のなかに危険も含んでいる。それは大盤の指揮間の結合、同盟者に対する積極的な同調、日報動播を容易に生み出す」(選集第七巻)といい、だ々々義との「結合」「積極的な同調」のうえになりたロツキーの統一戦線こそが、このような「危険」をだすのであると言うトロツキーの統一戦線、戦術に、党の指導と、大衆の指導との厳密な区別といふ大衆追随主義に対しても批判をつきだしている。そして大衆の大多数の獲得、大衆の意見にあたつて、党の正しい方針や、ストーランによる宣傳活動が必要ではあるが、それだけでは不充分なことには大衆自身の経験を通じて、彼らに理解させねばならないことをおしえている、とデイミットロフは提示しているの

視するから、ジーの城塞とみなされると考えることは出来ない。数十年にわ
の闘いとし、たつてそこがこれまできたブルジョアジーとの階級協調のイデ
アートのオロギーの影響下にある社会民主要奪のこういう労働者達が、
め、組織して自分からすんで客観的原因だけの働きによつて、このイデオ
ロレタリオロギーと手を切ると期待してはならない。いや、彼らが改良主
義との日常的イデオロギーの束縛から解放されるのを待つることこそ、
レタリアを我々の仕事、共産主義者の仕事である。共産主義の原則と綱領
戦線は、を解説する仕事は、辛抱づよく、同志的なやりかたでおこなわ
らなければならない。そしてまた、それは個々の社会民主党の發
見主義的獲得でのなればならない。そこでまた、それは個々の社会民主党の發
展程度に適応してやらねばならない。社会民主主義に対する
が社会民主主義我々の批判は、もつと具体的、系統的にならねばならぬし、
っているトまた社会民主共产党の大衆自身の経験にもとづかねばならない。
断に生み階級的に対抗して共産主義者と共に行動おこなうにあたつて、
に對しては、まず社会民主共产党下の労働者の経験を利用することにより、彼
ルクス主義らの革命的發展を容易にすることが可能であり、かつ必要であ
る」と言つ
ると統一戦線に對しての態度は「社会民主主義の反動的部
分と革命化しつつある部分との境界線である。後者に對する我
々の支持は、ブルジョアジーとのブロックに參加している社会
主義の変革民主要反動的陣営にたいする我々の闘争を強化すればするほ
うそのためそれだけ有効になるであろう。また共産主義者が社会民主共产党
ではないこと統一戦線のために斷固として闘かねば闘かうほど、左翼陣営
内の種々の要素の自決はそれだけはやくなるだろう。階級闘争
と社会民主要員の統一戦線運動への参加の経験は、社会民主主

共産主義的戦術の未貫徹

共産主義的戦術の未貫徹

ミンテルンにおける、トロッキーの統一戦線「戦術的根本的弱点を根本的に克服する積極的側面をつき出しているが、「いまや幾多の国々の勤労大衆はプロレタリア独裁かブルジョア民主

本号の終りに

本号の終りに